

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 李 麗

論 文 題 目

陳元賛の傳記、書翰と『老子經通考』の思想

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	吉田 純
委員	名古屋大学教授	塩村 耕
委員	名古屋大学教授	加藤久美子
委員	名古屋大学准教授	田村加代子

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は江戸初期日本に渡来し日本文化に寄与した陳元賛の、伝記や書翰の整理を行い、その著書『老子経通考』に見られる林希逸批判の考察を通して、初めて陳元賛の思想を総体的に明らかにしようとしたものである。

第一章「陳元賛の伝記と年譜」では、まず江戸期の主な陳元賛の伝記史料を一堂に集めて年代順に整理した。次に、尾張藩士中山和清著『諸士傳略稿』の陳元賛伝を精査することで、各伝記間の不一致を訂正した。最後に出典史料の具体的な内容を提示した陳元賛の略年譜を作成し、陳元賛の生涯を明らかにした。

第二章「陳元賛来日の目的——『人見雑記』の記録を中心に——」では、まず彰考館所蔵『源義公御筆陳元賛書入』により、陳元賛と水戸藩義公德川光圀との交流を明らかにした。『人見雑記』の著者は義公に仕えた人見ト幽とし、その記述の読解を試み、陳元賛が兄とともに盗賊探しのために来日したという新説を提示した。

第三章「陳元賛の書翰」は、未公開史料である瑞光寺蔵『陳元賛書牘（開山宛）二十四通』（真蹟）や『芝山尺牘』五十八通を翻刻し、内閣文庫蔵『陳元賛書翰』との比較により、内閣文庫本の正誤表を作成し、転写本である内閣文庫本の修正を行った。

第四章「『老子経通考』の序跋と伝本研究」では、陳元賛の『老子経通考』の序文を考察し、陳元賛が八十四歳の時に当時の日本の老子受容の状況を嘆いて、初心者のために『老子経通考』を完成させたという執筆の目的を明らかにした。

第五章「陳元賛『老子経通考』と焦竑『老子翼』——引用状況に基づく考察——」では、『老子経通考』と『老子翼』に見られる様々な『老子』注釈の引用状況を一覧表にして具体的に示し、陳元賛は焦竑の『老子翼』を底本とし、当時日本で読まれていた林希逸註などを付け加えて引用し、好ましくない諸家註、特に林希逸註に対する批判が見られることを指摘した。

第六章「陳元賛の有無観」では、林希逸の仏教的な「有無中道」観に対する批判を手がかりに陳元賛の有無観を考察し、林希逸の儒家心学的な老子解釈及び仏教の「空」の思想で老子の「無」を解釈することは老子の本意でないと批判したことを明示した。

第七章では、『老子経通考』第五章にみえる『老子麴齋口義』批判を中心に、陳元賛の「天心聖心一致」論を明らかにした。また陳元賛は、林羅山の道春点、頭書『老子麴齋口義』の頭書に引用されている程伊川の説にいたく反対しており、陳元賛は、程伊川の考えに同意している林羅山の老子観を暗に批判しようという意図があるのではないかと推測した。

第八章「陳元賛の実学思想」では、『老子経通考』に見られる林希逸批判のうち、主に「実理」に関わる各章を取り上げ、まず『老子』の本文を提示し、次に林希逸『老子麴齋口義』の注釈を考察し、林希逸の老子に対する誤解を明らかにすることによって、『老子経通考』が林希逸を批判しているとした。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

陳元賛（一五八七～一六七一）は一六一九年に来日し、本邦で生涯を終え、多芸博識で、詩、書、製陶、拳法など多方面に互って江戸時代初期の日本文化に少なからぬ貢献をした人物である。本論文はこの陳元賛について、伝記、書翰、著書『老子経通考』の三つの方面から総合的に論じている。

伝記について最も詳しい先行研究は小松原濤『陳元賛の研究』であるが、本論文はその成果を受け継ぎ、かつ批判的に検討することにより、新たな内容を加えている。陳元賛に関する江戸期の史料の具体的な内容を年代順に挙げ、一覧表と年譜の形で整理した。そこから各史料間の相異が一目瞭然となり、陳元賛伝の全体像を把握することができるようになった。

日蓮宗の僧である元政上人と渡来明人陳元賛との交流は、日中文化交流史上において重要な意味を持つ。陳元賛が元政上人との漢詩の唱和を通じて、元政に袁宏道の詩を推薦し、さらに元政の影響力で性霊派詩風が日本に伝えられた。

現存する陳元賛書翰のうち、陳元賛が元政上人（一六二三～六八）に宛てた書翰が最も多い。瑞光寺草山文庫所蔵の陳元賛真蹟と内閣文庫蔵『陳元賛書翰』の転写本とを比較すると十五通重複していることが分かり、さらにその内容の比較により、内閣文庫蔵『陳元賛書翰』に誤写と錯簡があったことを明らかにすることができた。更に元賛の書翰集『芝山尺牘』（元政筆）を発掘し、諸本の比較により『芝山尺牘』が内閣文庫蔵『陳元賛書翰』の底本であるとし、『芝山尺牘』によって内閣文庫本の誤りを補正し、それによって両者の交流を有機的に跡づけることが可能となった。

『老子経通考』は、『老子』を河上公註によって解釈すべきとの立場で書かれたもので、陳元賛の思想を代表するものである。陳元賛が来日した江戸時代初期には、林希逸の『老子麴齋口義』の台頭によって、老子河上公註は版本では読みにくい状況となっていた。その中で、『通考』には『口義』の引用が全部で三十八章あり、多くは批判的に引用されている。たとえば、『老子』第五章「天地不仁」「聖人不仁」の解釈で、林希逸、程伊川のいずれもが「聖人不仁」を肯うのに対し、陳元賛だけが「天心聖人一致」を主張する。程伊川の文章は林羅山が訓点を施して出版した、林希逸『老子麴齋口義』の頭書にも見られる。『老子麴齋口義』が日本で大いに受け入れられたのは、林羅山が同書を称賛したことと密接に関係しており、陳元賛は単に程子の説を批判しているだけでなく、実は林羅山の老子観をも批判しているものと推論した。この指摘は重要で、日本における『老子』受容史に新たな局面を提示している。

しかし本論文にも不十分な点が無い訳ではない。特に『老子経通考』の内容的検討には更なる余地を残す。とはいえ長い時間をかけて丹念に、陳元賛の伝記と文業とを総合的に論じた価値は大きく、労作の名に値する。以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。